

童話集『Stories told to a child 子どものためのお話集』(一八六六)、『The Little Wonder-Horn 小さい魔法の笛』(七二)などの子ども向けの物語を著した。代表作は妖精の国を扱った夢物語ともいべき『Mopsa the Fairy 妖精モプサ』(六九)で、これは同時代のルイス・キャロルの『ふしきの国のアリス』(六五)の影響を受けたナンセンス風な作品として注目を集めた。

(定松 正)

ウ

尹石重  
犬童球溪  
一八七九～一九四三(明12～昭18)  
作詩・作曲家。熊本県人吉市球磨川のほとりに生まれ、熊本師範を経て東京音楽学校卒業。新潟高女教諭時代に『故郷の廢家』『旅愁』(以上、一九〇六)の代表作を作詞、とくに女学生に愛唱された。帰郷後も、西洋音楽の紹介と西洋的リズムに似合つた作詞を主とし、国際感覚を重視した音楽教育に尽くした。退職後、歌曲集『四季』(三六)出版。人吉城跡内の『故郷の廢家』詩碑前では、毎年一月に合唱祭が行われている。

(中村青史)

ヴァンバ Vamba 一八六〇～一九二〇 イタリアの児童文学作家、ジャーナリスト。本名はルイージ・ベルテッリ。フィレンツェの生まれ。学校を卒業するとすぐ鉄道管理局の職員となつたが、やがてローマに出て、「カピタン・フラカッサ」などの風刺的な政治新聞に寄稿するようになり、母の死とともにフィレンツエに戻つてからは、ユーモラスな週刊誌「オーラ・ディ・ジョット」などを創刊した。結婚して子どもが生まれた後、児童文学に関心をもち、最初の作品『チヨンドリーノ』(一八九二)を出版した。この蟻に変身した子どもの話は、空想性と科学性の統一という点で高く評価された。その後、一九〇六年に「日曜新聞」を創刊して、当時のイタリア文壇の著名な作家たちを登場させる一方、新人たちもどんどん発掘していく。いたずらっ子を思う存分活躍させた代表作『あくたれジャンの日記』は、「日曜新聞」に連載され、大変な好評を得

たのち、一二年に一冊の本となつた。 (安藤美紀夫)

ヴァン・ルーン → ローン、ヴァン

ヴィヴィエ コレット Colette Vivier 一八九八～

九七九 フランスの児童文学作家。ジュネス賞の『La

*Maison des petits bonheurs* 小さな幸せの住む家』(一

九三九)に代表される作風は、日常生活の細部を自然な

文体で率直に描くところにある。レジスタンスの物語

『ぼくは英雄を見た』(四五)においても、視点は常に子

どを取り巻く人間関係に置かれ、親交のあつたヴィ

ルドラックの人間愛の世界と共通する温かさをもつ。

一九七二年と七四年に国際アンデルセン賞作家賞のオ

(新倉朗子)

ナーリストとなつた。

ヴィギン ケイト ダグラス Kate Douglas Wig-

gin 一八五六～一九二三 アメリカの児童文学作家、教

育者。フローベル教育法に学び、生涯を通じて幼稚園

教育と深くかかわりながら、二十数作の児童文学作品

および大人向きの小説を執筆する。当時の理想の少女

像を描き、かつ作者自身の少女時代をも彷彿とさせる

代表作『少女レベッカ』(一九〇三)は、国内でベストセ

ラーとなり、數々国語に翻訳された。そのほか、幼稚

園教育に関する数冊の著書がある。

(横川寿美子)

ヴィース ヨハン ルードルフ Johann Rudolf

Wyß 一七八一～一八三〇 スイスの作家。ベルン大学

の哲学の教授を務め、スイス国歌の作詞者として知ら

れるが、児童文学の領域での功績は父ヨハン・ダーフィト・ヴィースが子どもたちのために書いた『スイスのロビンソン』を校訂し、四巻にまとめて刊行(一八一二～二七)したことにある。「家族ロビンソン」の名があるこの著名な作品も、彼の尽力がなければ世に知られることがなく終わつたであろう。

(関 楠生)

ヴィゼンティーニ オルガ Olga Visentini 一八九三～一九六一 イタリアの児童文学作家。フィレンツェ

で大学を卒業した後、「日曜新聞」「コソリエーレ・デ

イ・ピッコリ」などの児童新聞に多くの作品を寄稿し

ながら、『La zingarella e la principessa ジプシーの

むすめとお姫さま』(一九一〇)で児童文学の世界に入

り、その後少女向けの作品を数多く書き続けた。『Stelle su mare 海の星』(五七)などがそれである。ほかに

『Libri e ragazzi 本と子どもたち』(三三)のような研

究的著作もある。

(安藤美紀夫)

ヴィーダ Ouida 一八三九～一九〇八 イギリスの

小説家、児童文学作家。本名マリ・ルイーズ・ド・ラ・

ラメー。イギリス東部のパリイ・セント・エドマンズ

で生まれたが、父がフランス人で、故国フランスのパ

リに移り住んだ。父の死去とともに母の故国イギリス

に帰る。幼少時より動植物を愛し、文学に親しむ。二

〇歳ごろより小説を書きはじめ、当初メロドラマ風の

大人の小説を多く書き、いくつ『Held in Bondage と

らわれの身となつて』(一八六二)や、『Under Two Flags』二つの国旗の下に』(六七)などが広く読まれ、後者は映画化された。一八七年にはイタリアに渡り、フランス地方の風土を愛し、ここで自身の生涯を閉じた。生前、ペットとして多くの犬を飼い、かわいがつたが『フランスの犬』(七一)が生まれる動機がここにあつた。ルーベンスの絵画の前で死を遂げていく感動的物語は、近代的な動物物語の先駆を成したが、

孤児となり救いもなく飢えていく少年を慕つてかわいがられていた老犬が少年の体を暖めつつ、殉死していく姿に、この作者は現実の厳しさと自らのロマンとを調和させた。一九五九年には、アメリカで映画化された。そのほか、『Stories for Children』子どもたちへの物語』(八一)に収録された『The Nürnberg Stove』、『ニュルンベルクのストーブ』、『帰ってきたむく犬』などが知られている。我が国では、まず一九〇八年に『フランスの犬』が翻案風に訳され、以降、外国の古典的名作の一つとしてゆるぎない位置を占め、多くの子どもたちに感動を与えた。

(原 昌)

ヴィヒェルト エルンスト Ernst Wiechart 一八

八七—一九五〇 ドイツの作家、児童文学者。一九三三年まで学校教員。作家として独立後、ナチズム批判を続け、三八年に強制収容所に収容される。四八年、ドイツの状況に絶望して、スイスに移住。作品に、『Der

Totenwald 死者の森』(一九四六)、『Das einfache Leben 単純な生活』(三九)など。四六年に『ヴィヒェルト童話集』を発表。貧しい民族の子らに、最終的正義の存在を示すために書いたという序文があり、ドイツ語圏と日本で多大の反響を呼んだ。『ヴィヒェルト童話集』は、いずれもドイツの伝承上の魔女や小人を登場させるが、幼い主人公は、常に真心によつて救いを得ていく。

(小澤俊夫)

ヴィポン エルフリーダ Elfrieda Vipont 一九〇一—イギリスの児童文学作家。声楽家としての経験をもとにした『暁のひばり』(一九四八)、その続編『飛ぶひばり』(五〇 カーネギー賞受賞)など、主人公が夢を実現していく職業物語の流れをくむ作品のほか、幼年向きの絵本も数多く発表。またクエーカー教徒としての信条を反映して『The Story of Christianity in Britain 英国のキリスト教の物語』(六〇)をはじめ、クエーカーについての本を執筆。大人向けの小説も多数ある。

(早川敦子)

ヴィリアムズ ガース Garth Williams 一九一二

アメリカのイラストレーター。ニューヨーク生まれ。イギリスの美術学校で学び、欧洲各地で研鑽を積む。一九四一年アメリカに帰り、挿絵画家となり、E・B・ホワイトの作品に挿絵を描いて以来、ワイルダー・シャープなどの児童書に挿絵を描く。『いろいろおき

とくろいうさぎ』(一九五八)など自作の絵本も多く、温か味ある繊細な鉛筆画に定評がある。

(白井澄子)

『ヴィルコノ』ユゼフ Józef Wilkoni 一九三〇— ポーランドのイラストレーター、画家。とくにイラストレーターとして国際的評価が高く、BIB世界絵本原画展での金賞受賞(一九六九)をはじめ数多くの賞を得ている。東洋の水墨画に学んだ筆遣いと独特的な色彩感覚、卓越したテクニックが次々と傑作を生んでいる。日本でもドイツで出版した『わいわいぬ』(八一)、「やさしいおおかみ」(八二)などが紹介され注目されている。

(内田莉莎子)

『ヴィルドラック』シャルル Charles Vildrac 一八八二—一九七一 フランスの詩人、劇作家。本名シャルル・メサジエ。パリに生まれる。詩のグループ「僧院派」で作家活動をはじめるが、戦後劇作に転じ『商船テナシティ』(一九一〇)がヴィュ・コロンビエ座で好評を博する。児童文学作品にはロビンソンナードの一種『ばら色島』(一四)、『続ばら色島』(一八)や、『ライオンのめがね』(三二)のほか小さなパリジェンヌの話『Bridinette』アリディネット』(四七)、アルティザンとして生きる道をみつける少年の話『Milot』(四八)がある。

(石沢小枝子)

『ワインター・ホルト』ヘンリー Henry Winterfeld 一九〇一— ドイツの児童文学作家。作曲家の息子と

してベルリンに生まれたが、一九四〇年にアメリカに移住し、メイン州に住んで、主としてドイツ語で作品を発表している。最初の『子どもだけの町』では、大人がいなくなつた子どもたちだけの世界を、『カイウスはばかだ』(一九五三)、『カイウスはひらめいた』(六九)、『Cains in der Klemme』カイウスはこまつた』(七六)の三部作では、古代ローマでの少年探偵団の活躍を、作者自身が最も重要な作品と考える『星からきた少女』(五六)では、異星からきた少女が地球の子どもたちと過ごす一日のでき事を、『小人国漂流記』(五八)では、現代の小人国に漂着した子どもたちのとまどいを描くというように、ファンタスティックな状況の設定のみさに加えて、読者をぐんぐん引っ張つていく筆力のたくましさが、この作家の人気の理由であろう。

(関 楠生)

『ウェザレル』エリザベス Elizabeth Wetherell 一八一九—八五 アメリカの作家。本名スーザン・B・ウォーナー。一八五一年『The Wide, Wide World 広い広い世界へ』で登場。孤児が幾多の苦難を経て幸福をつかむ過程が、当時の大人の小説のスタイルをまねて全編涙、涙の洪水でつづられ、異常なまでの売れゆきをみせた。翌年『Queen of the Cuiqueen』を出す。これらは当時のニューヨークの風景、生活、社会状況の描写に優れると同時に日常の子細にわたる内容が歴

史的に興味深いといわれる。

(島式子)

上沢謙二<sup>うえさわ けんじ</sup> 一八九〇～一九七八(明23～昭53)

キリスト教児童文学者。筆名あがたしげる。栃木県上

都賀郡東大芦村に生まれる。上京して日本銀行に給仕

として働くかたわらキリスト教に入信、英語を学ぶ。

日曜学校の教師となり、巖谷小波のお伽噺、アンデル

セン童話などの影響を受け、処女作集『物語又逢ふ日

まで』(一九一七)を出し、これを第一集として一〇集ま

で刊行。結婚後、アメリカに留学、ワシントン州立大

学教育学科を卒業。帰国後、日本日曜学校協会主事と

なる。婦人之友社の「\*子供之友」編集主任を務めた後、

東京洗足幼稚園長となる。一九三一年(昭6)には我が

国ではじめての子ども向き聖書の逐語訳『子ども聖書

うれしいお知らせ』を刊行、翌三二年から同志とともに

に「基督教童話協会」を組織、キリスト教児童文学雑

誌、月刊『光の子』を出し、キリスト教児童文学運動

を推進、会員の作品を集めた『基督教児童文学選集』

(三五)を刊行している。第二次大戦後も「キリスト教児

童文学』(五七～五九)に拠り、一貫してキリスト教児童

文学のために真摯な活動を続け、多くの著作を残した。

主著に『上沢謙二物語集』一〇巻(一七～一九)、「幼年

クリスマス童話集』(三一)、『イースター<sup>童話・物語・児童説教選</sup>』(三三)、『新幼児はなし三百六十五日』四巻(三五～三

六)、『日本日曜学校史』(四〇)、『幼児のお話教育』(四

八)などがある。晩年は郷里の栃木県鹿沼市の鹿沼幼稚園長を務め、個人雑誌「ひとつの星」(六四～六六)を主宰した。

キリストール ロバート Robert Westall 一九二九～イギリスの児童文学作家。サー・ジョン・ディーン・グラマースクールの職業科主任を務めるかたわら

作品を発表し、その第一作、第二次大戦中のイギリスの港町を舞台とした『機関銃要塞』の少年たち』(一九七五)は、カーネギー賞を受賞するなど、高い評価を受けた。そのほかの作品には、聖者の子孫の一家を描いたファンタジー『風の目』(七六)などがある。(越智道雄)

ヴェソース ハルディス モーレン Haldis Moren Vesasas 一九〇七～ノルウェーの女流詩人、児童文学作家。父は児童文学作家スヴェン・モーレン。

夫は詩人タリエイ・ヴェソース。落ちつきのある伸びやかな詩の詩集を一九二九年に出版する。児童文学

『Du får giera det, du あなたののしごと』(一九三五)と『Den grønne hatten みどり色の帽子』(三八)はみずみずしさと健全なぬくもりにあふれ、『早春』(四九)

は一五歳の少女の感性を描いた優れた作品であり、教育省の大賞を受ける。

上田萬年<sup>うえだ まんねん</sup> 一八六七～一九三七(慶応3～昭12)

国語学者。文学博士。東京大久保に生まれる。東京帝

国大学文科大学卒(一八八八)。言語学を修め、後独仏に

留学、帰国後、ヨーロッパ言語学の研究を紹介し、近代国語学の基礎を構築した。文科大学兼東京高師教授を経て文部省専門学務局長時代、澤柳政太郎とともに近代的文教政策を推進した。のち文科大学、神宮皇學館、国学院大学の学長を歴任した。児童文学の面においては、一八八九年に『おほかみ』(「おおかみと七匹の子やぎ」グリム童話五番)を訳出し、『新訳伊蘇普物語』(梶田半古 挿絵一九〇七)、『安得仙家庭物語』(橋口五葉挿絵一二)はいずれも大正期にわたって長く読み継がれ、その後の訳出に影響を与えた。平易な口語文体で訳され親しまれた。そのほか明治の児童書や家庭叢書などの監修や編集顧問にも萬年の名が往々見られる。

植田敏郎 一九〇八(明41) 独文学者、翻訳家。広島市に生まれ、東京大学文学部独文科卒業後、ウェーラン大学で博士号を取得。専門はゲーテ時代で、代表的著作としてヘルダーに関する論文『神についての会話』(一九六八)がある。一九四九年、ベルの童話集を『りこうなむくどり』と題して翻訳、出版したのを皮切りに、ドイツ語圏児童文学の翻訳紹介に努める。本国ではよく知られながら、植田訳が邦初訳のヘーベル、ベヒシュタインをはじめ、グリム、ザッパー、ケストナーなど、多くの作家の作品を訳し、七年『クリュス選集』全五卷(一九七三)で日本翻訳文化賞受賞。七二年にはベルガーの『大草原の冒險』(七二)でサンケイ児童出版文化賞推薦図書となる。また、『少年少女のためのドイツ文学の歩み』(六五)『少年少女世界の名作文学32』や『世界児童文学の歴史—ドイツ・スイス』(七六)『世界児童文学概論』は、ドイツ児童

上田次郎 一九一五(大4) 人形劇人。(滑川道夫)

上田市生まれ。日本神学校卒、一九三三年より、絵はなし、人形芝居(独り舞台)をもつて主にキリスト教会巡回。四二年応召。戦後五三年より八五年まで、NHK、NTVなどテレビ各局の児童・学校教育諸番組に関係、司会・出演・美術などを担当、人形劇の普及に貢献した。日本人形劇人協会理事長を務める。著書に、『たのしい工作』(一九六四)『たのしい折り紙』(五五)、『たのしい指人形劇のすべて』(五八)など。(加藤暁子)

上田としこ 一九一七(大6) 漫画家。本名俊子。東京都に生まれる。頌栄高女卒。松本かつ

文学史概論として貴重な資料である。『定本ビール読本』(七二)をはじめとして、ビールのエッセイも數多く著している。

(若林ひとみ)

ヴェーツエル ペーター Peter Wezel 〔一九四一〕

スイスの絵本作家。見習いのグラフィックデザイナーとして働きチューリヒの工芸学校で学び、商業デザイナーとして活躍。『かわいいことり』(一九六四)、『いたずらことり』(一九六七)はともにクレパスで描く文字なし絵本。ピンクのかわいい小鳥ネームークと小さい赤い魚の愛を描き、白いいたずら小鳥のフィガロが赤猫に挑む話を描く。素朴でわかりやすい話とユーモラスで少々難解な話という対照も面白い。

(森久保仙太郎)

上野紀子 〔うえの のりこ〕 一九四〇— (昭15—) 絵本作家。

埼玉県に生まれる。日本大学芸術学部美術科卒。文字なし絵本『Elephant Buttons』(一九七三)でアメリカの絵本界に登場(日本版『ぞうのボタン』七五)。以後、夫、中江嘉男と組んで、ナンセンス風な世界を描く数少ない画家として精力的に作品を出している。『ねずみくんのチョッキ』(七四)をはじめとする『ねずみくんシリーズ』や黒帽子の女の子を造形して不思議な雰囲気を醸す『くろぼうちゃん』(七四)、単純なほてなし話に「おち」が加味された筋立ては人気が高い。画題は豊富で、タブローの画集も注目される。講談社出版文化賞受賞。

(中村悦子)

上野 瞭 〔りょう〕 一九二八— (昭3—) 児童文学

（上野 瞭）

作家、評論家。本名、瞭。京都市に生まれる。京都二商立命館専門部を経て同志社大学文化学科へ進む。フランス文学に惹かれ、日仏会館に通う。在学中、親友片山寿昭(悠)の援助で、一〇代後半から「木馬」「詩の国」などに発表した作品を『童話集』(一九五〇)として出版。同大学卒業後平安高校で教鞭を執り国語を担当する。かたわら「馬車の会」に拠つて、片山悠、岩本敏男らとともに新しい児童文学を模索する。その後奈良佐保女学院短大を経て同志社女子大学に移り、同大学教授として児童文化を担当する。評論としては『戦後児童文学論』(六七)が出発点であり、その後の論点のベースを明確に打ち出したものである。戦後一〇年たった時代の慢性的不況の原因を、戦後民主主義を所与の価値として認識せず、したがつてそれを自己自身の価値に転化するための内的葛藤を欠いた結果起きた錯謬だと鋭く指摘した。ややもすれば児童文学にかかる大人たち全般に内包される現実認識の弱さをつき、文学としての児童文学の可能性を説いた新鮮な論であった。以後『わたしの児童文学ノート』(七〇)、『現代の児童文学』(七二)、『ネバーランドの発想』(七四)、『子どもの国の太鼓たたき』(七六)、『われらの時代のピーターパン』(七八)、『アリスたちの麦わら帽子』(八四)などに受け継がれ、若い層を児童文学に駆り立てる力を持った。

ての役割を果たした。創作としては『空は深くて暗かつた』(六五)が処女作だが、『ちよんまげまり歌』(六八)でドラマづくりの妙味を示し、また人間に巢食う獸性、影の部分の陰湿さを独特的の筆さばきでえぐり出した。以後『目こぼし歌こぼし』(七四)、『日本宝島』(七六)、『さらば、おやじどの』(八五)と大長編を発表し、まげものの児童文学に独自の世界を開拓した。『ひげよ、さらば』(八二)では登場人物を猫に置き換え、記憶喪失のヨゴロウザを中心に冒險と戦いの果てに野良猫共同体を夢みる骨太いファンタジーを構築した。この作品で一九八三年度日本児童文学者協会賞を受賞した。ほかに童話として『もしもし』、『ちらライオン』(七九)、『もしもし、こちらオオカミ』(八〇)、『そいつの名前ははっぱつぱ』(八五)などがある。

「さらば、おやじどの」長編小説。一九八五年刊。御番所頭を父にもつ新吾は、ふとした事件から父に裁かれ牢に入れられる。そこで無実の罪に泣く老人や奥牢に隠されている正体不明のさむらいの存在を知り、為政者のからくりに目覚める。出牢した新吾は、暴走馬操る黒覆面の若者たちと力を合わせ、眞実を暴こうとする。暴走族、ストリーキング、衝動殺人、大量虐殺、親殺し、火付け、暗殺を巧みに盛り込み、父と子、共同体と個人の対決を通して普遍的でありながら最も現代的な葛藤を鮮やかに描き出した大作。(松田司郎)

ウェブスター ジーン Jean Webster 一八七六

一九一六 アメリカの児童文学作家、小説家。本名アーリス・J・C・ウェブスター。マーク・トウェインの姪の娘としてニューヨーク州に生まれる。大学時代、英語と経済学を専攻するかたわら、学内誌を舞台に文筆活動を開始する。学生時代に孤児院や少年院をたびたび訪れ、不利な人生のスタートをきった子どもたちにも成功するチャンスが与えられるべきであるとの確信を抱くようになった。小説家として数冊の作品の出版をみたあと、一九一二年に『足ながおじさん』を発表。孤児院出身の少女の成長と恋愛を生き生きとユーモラスに描いた同書はたちまち世界中にその名を知られるようになり、日本でも東健而訳『蚊とんぼスミス』(一九一九)としていち早く紹介された。一方、社会施設の改善家としても広く活躍し、その経験は『続足ながおじさん』(一五)に色濃く反映されている。一五年結婚。翌年、長女出産後まもなく死去。(横川寿美子)

植松 朝作 よえまつ 一九三一～八八(昭6～63)児童文学作家。山形県神町の果樹農家に生まれる。村山農学校卒業。一九四四年、日本海軍に果樹園を接收され開拓地に入植、戦後、再び米軍に接収される。六〇年、農村を舞台に行われた米軍の演習を『山が泣いている』にまとめた共同創作に参加した。農民運動や基地闘争を背景とした『りんごのうた』(一九七二)、『野うきぎ

村の戦争』(七七)、『もへらんばひとつ』(八一)などの作品がある。

(武田京子)

ウエルクスホイス コルネリス Cornelis Wilhelmsius 一八九六—一九八二 オランダの児童文学作家。当初教師をしていたが、のち作家活動に入った。彼はフランス哲学者、ディドロについての研究書なども発表している。数多くの作品を書いてきたが、その中にはいろいろな時代を舞台にした物語もある。一九六三年、デーフンテル市はウエルクスホイスの作品全体に対する、「金のワシ」という文化賞を授けた。彼の作品の中でも、主要なものをあげると、『Haantje als detectiveハーンチエの探偵』(一九三三)、『Raketvlucht naar Mars 火星へとぶロケット』(一九三〇)、『De zoon van de zeerover 海賊の息子』(六九)、『De spion van Deventer デーフンテルのスパイ』(七一)などがある。なお、『ウンデ姫と海べのおまつり』(五九)という作品は、日本語版が出ているが、これは悪い王様が、良い王様の治めている国に攻め入るが、結局は戦争ができなくなる。ユーモラスな筆遣いで武力の空しさ、平和の尊さを説いた物語である。

(熊倉美康)

シム』(一八九五)はタイム・トラベルを扱う現代のファンタジー作品を生み出す一因となった。ほかに『透明人間』(九七)と『月世界初飛行』(一九〇一)によつて、科学的ロマンス作家としての地位を確立し、SFのジャンル成立に大きな影響を及ぼした。『The War of the Worlds 宇宙戦争』(一八九八)にみられるように、ウェルズ自身 social fables と称したこれらの作品群は、一貫して人間世界の科学の進歩過信が抱かせる想像に対する警鐘である点に、その問題提起の現代性を見る。これらの作品群がネズビット以後のファンタジーに影響を与えたと指摘する者もいる。世界史、文化史の著書によつても知られる。

(高桑啓介)

ヴェルヌ ジュール Jules Verne 一八二八—一九〇五

フランスの小説家、SF文学の創始者。ナント市を流れるロアール川の中の島、フェイド島に生まれる。父は公証人、当時、ナントはフランス海運業の中心地で西インド諸島、アフリカなどへの遠洋航海の基地であり航海しない」と誓つたと伝えられる。一八四七年法の旅をテーマとする作品があり、中でも『タイム・マ

ウエルズ H.G. Herbert George Wells 一八六六—一九四六 イギリスの小説家、文明批評家。ケント州に生まれ、ロンドン大学で科学を学ぶ。異次元世界への旅をテーマとする作品があり、中でも『タイム・マ

に師事して劇作を学び韻文喜劇『Les pailles rompues 麦わらのかげ』、オペレッタ『Colin-Maillard 鬼』の娘を連れた若い未亡人オノリーヌと結婚し、劇作のほかに小説を書きはじめ大洋や極地、空中飛行を扱った短編を発表した。六二年、友人の画家で写真家のナダールから大気球「巨人号」を建造する計画を聞き、気球によつてアフリカ大陸を飛行する小説『気球に乗つて五週間』を書きあげた。ちょうどそのころ新しいう児童雑誌の刊行を準備中であつた出版社主エツツエルがその作品の真価を見抜き六三年に自社から刊行し大成功を収めた。ヴエルヌは、一躍、人気作家となり、以後、エツツエル社から『驚くべき冒險旅行』シリーズ六四巻の長編を刊行した。代表作は、『地底旅行』（一八六四）、『月世界旅行』（一八五）、『グランツ船長の子供たち』（一六七）、『海底二万里』（七〇）、『八〇日間世界一周』（七三）、『二年間の休暇』（八八）。ところで、彼の作品の人気の秘密はどこにあつたのだろうか、当時の人々は科学技術のめざましい進歩を目の前にして未来に大きな期待を抱いた。ヴエルヌは、月や海底への旅行の作品によつて人々の期待を現実のものとして提示したのである。このように華々しい成功を収めたヴエルヌにしては晩年は痛ましいものであつた。七〇年以降は妻の郷里アミアンに暮らし、八三年に恩人エッ

ツエルが死去した。その一〇日前に甥のガストンによってピストルで足を撃たれ、杖なしには歩けない体になつた。そのためか、極度の人間ぎらいに陥り神経衰弱も重なつて一人書齋に閉じこもつてもの思いにふれるようになつた。一九〇五年三月一四日朝、糖尿病が悪化し七七年の生涯を終えた。墓はアメリカンにあり、「不死と永遠のために」の碑銘が刻まれている。ヴエルヌは、長いこと子ども向けの科学冒險小説家としてみなされてきたが、フランスでは四九年以降、ピュートーとフーコー、バルトらによつて未來の予見者として再評価され、構造主義批評の視点からの評論も多く發表されている。日本には、一八七八年『新訳八十日間世界一周』（川島忠之助訳）によつてはじめて紹介され、ついで、『五大洲中海底旅行』（八七 大平三次訳）『二年間の休暇』が九四年、森田思軒の名訳による『十五少年』として紹介され、明治開化期の少年の冒險心を育てた。

〔二年間の休暇〕にねんかん Deux ans de vacances 冒險小説。ヴエルヌの作品では、空想科学小説ではなく孤島や未開地を舞台にした冒險小説に分類できる。彼の作品としては、晩年に近い一八八五年に刊行された。フランスでは、空想科学小説でないためか評判にならなかつたが、日本では明治期の少年に熱読された。これは、比較文学の興味ある問題である。南米の孤島に

漂着した国籍、年齢、性格の異なる少年たちが苦難をともにする間に反目、対立が解け無事に帰国するまでの二年間を描いてみことな成長小説となつてゐる。『十五才の船長』（一八七八）の続編である。

【参考文献】私市和彦『ネモ船長と青ひげ』（一九七八 品文社）

（塚原亮二）

ヴェルフェル ウルズラ Ursula Wölfel 一九二二— ドイツの女流児童文学作家。フランクフルト大学でドイツ学を、ダルムシュタット教育研究所で教育学を学び、第二次大戦で夫を失つて、戦後に児童文学作品を書きはじめた。『こんにちはスザンナ』（一九六〇）がドイツ児童図書賞選定リストに載せられ、次の『火のくつと風のサンダル』（六一）はドイツ児童図書賞を受けた。靴直しの子チムが誕生日のお祝いとして父親に徒步旅行に連れていくつてもらう話で、二人はそれぞれインディアン風に火の靴、風のサンダルと名乗つて、さまざまな冒險を体験する。何でもないことが少年にとっては大冒険で、そこから生じるおかしみと、子どもの世界への理解、共感、愛情とが、作品を支えて成功に導いた。『灰色の烟と緑の烟』（七〇）は社会問題をいわば解決なしに投げ出した形の短編集で、児童文学の新しい傾向を示すものとして論議を呼んだ。

（関 楠生）

ヴォイチェホフスカ マヤ Maia Wojciechowska

一九二七一 ポーランド生まれのアメリカの作家。一九四二年アメリカに移住。五〇年市民権獲得。翻訳家、私立探偵、編集者、プロのテニスコーチなどの仕事のかたわら創作活動を続けて、今日に至つてゐる。六年、少数者の立場に立たされた少年の自分の意志を貫くための闘いを描いた『闘牛の影』（一九六四）でニューベリー賞を受賞。二作をおいて次に続く『ひとすじの光』（六八）では名前さえもえなかつた耳の不自由な少女を主人公に、一つの時代の荒野に生きる人々の精神の荒廃と愛による復活を描き、同じ年の『LSD—兄ケビンのこと』では、放り出された時代の波をかぶつてもがく兄を弟の目を通して描き出した。作品に搖らぎのある作家で、そのある種の過剰さは人々の評価を割るが、自伝的小説『夜が明けるまで』（七二）は敗者としての子ども、少女から娘への闇の時期を大戦を背景に鋭く描いて注目された。

（清水真砂子）

ヴォースコボイニコフ ワシリ・M. Валерий Михаилович Воскобойников 一九三九一 ソビエトの作家。

レニングラードに生まれる。化学技師として働くうち、一九六〇年代後半から子どものための作品を書くようになつた。一〇歳の少女が学校生活の中で経験するいやなこと、うれしいことがこまやかに書かれてゐる『赤いノート』（一九七一）や小学生たちが昔の北極探検船長の航海日記の謎を追う『北極海の奇怪島』（八

一)は日本でも出版されている。

(北畠静子)

ウォツツ アイザック Isaac Watts 一六七四～一七

四八 イギリスの詩人。非国教派の牧師で、六〇〇編の  
讃美歌を収めた『Divine Songs, attempted in Easy

Language for the Use of Children 子どものためのや

おしい聖歌』(一七一五)を発表した。これは友人の三人  
の娘にささげられたもの。序文の中で、早くから子ども  
に信仰心を植えつけるべきであると説いているが、  
韻文は親しみやすく、子どもの理解力を考慮した詩集  
であつた。四年後にはアメリカでも出版され、長く読  
み継がれた。

(田中瑞枝)

ウォルシュ ジル・P. Jill Paton Walsh 一九三七  
～イギリスの児童文学作家。歴史小説『皇帝のきょう  
かたびら』(一九七四)をはじめ、空襲下のロンドンを舞  
台にした『焼あとの雑草』(六九)やベスト流行を扱つた  
『死の鐘はもう鳴らない』(八三)など史実に素材を得  
た一連のリアリズム小説のほか、意識の流れの手法に  
よる『海鳴りの丘』(七六)などを発表、人間の尊厳をめ  
ぐるテーマを開拓している。

(早川敦子)

ウォルフ フリードリヒ Friedrich Wolf 一八八八  
～一九五三 東ドイツの劇作家、小説家、医師。裕福な  
ユダヤ人商人の息子として生まれ、医学を学ぶ。第二次世界大戦時には軍医として従軍し、一九二八年共産  
党に入党。子どものものとしては、農民の暴動を描い

た戯曲『哀れなコンラート』(一九一四)、伝記物語『キ  
キ』(四一)、教訓が盛り込まれた動物物語集二冊(四六、  
五一)のほか、『寓話集』(五七)があるが、いずれも体制  
問題が盛り込まれた思想色の濃いものである。

(川西美沙)

ヴォロハーノー リュボーフィ・Φ. Любовь Фе-

доровна Воронкова 一九〇六～七六 ソビエトの児童  
文学作家。モスクワの農家に生まれ、教育大学で学ぶ。  
一九二九年からジャーナリストとして働きはじめたが  
そのかたわら文学の修業に励んだ。四〇年に短編集  
『Шурка シュールカ』が世に出たが、この作品で、身  
近で愛着のある農村を舞台に、子どもたちの生活を抒  
情的なタッチで描くという、児童文学作家としての方  
向が決定づけられた。この特徴はその後書かれたほと  
んどの作品に貫かれている。独ソ戦のさなかには戦争  
の悲惨さを体験する子どもたちの姿を描いた作品を書  
いたが、中でも『町からきた少女』(一九四三)は、戦争  
で孤児になつた少女が見知らぬ農村の家庭に引き取ら  
れ、しだいに明るさを取り戻していく物語で代表作となつた。ほかに『フェージヤかえつておいで』(五八)、  
『まほうの島のともだち』(六四)、『Личное счастье  
個人の幸福』(六一)、『野の白鳥アニスカ』(六六)など  
の作品がある。

(松谷さやか)

ウゴリーニ ルイージ Luigi Ugolini 一八九一～

イタリアの児童文学作家。フィレンツェに生まれ、ピサ大学で法律の勉強をした後、文学の道に進んだが、一九四〇年以降、ほとんどつぱら子どものための作品を書いた。ことに、シーザー・ヤダンテ、ダ・ヴィンチのようないいわくの伝記は有名であり、また創作として『Pa delle caverne 洞窟のバー』（一九五七）や『北極洋のとうそくカモメ』（六二）などで、カステッロ賞などのいくつかの賞を受賞している。（安藤美紀夫）

**氏原大作** うじはら 一九〇五年六月（明三八）～昭三一 文学作家。本名原卓。山口県生まれ。小学校教師を務め、中日戦争で中国北部に出征、一九四二年帰還。戦地で書きつづった『幼き者の旗』は『主婦之友』の懸賞第一位当選作となつて翌三九年同社から刊行され出世作となつた。戦場体験は、「少年俱楽部」「幼年俱楽部」などを発表の場に、長短の少年小説、童話として色濃く反映される。とくに『いくさの土産』（一九四二）は、兵隊と子どもの姿を捉えた長編で、時代相をみる貴重な資料としても再評価され、『少年小説大系』（八六）に組み込まれた。このほか戦中の作に『父なきあと』（四〇）、『もがり笛』（四三）などがある。戦後も『少年クラブ』に一年連載の『見たか青空』（五〇）などの力作を寄せたが、代表作は戦中（四一）から「少国民文化」などに前半を発表、中断していた長編『花の木鉄道』（五四）の病をおしての完成にみる。山村の習俗人情の中

に、汽車の開通を待つ素朴な夢ふくらむ少年群像を生き生きと描き出している佳品。死後『氏原大作全集』全四巻（七七）が出た。

（西沢正太郎）

**ウスチノフ レフ・Е. Лев Ефимович Устинов** 一九二三年一月（明三九）～ソビエトの児童劇作家。人気俳優オレグ・トバコフと共に作した『白雪姫と七人の小人』（六七邦訳・上演）をはじめとして、『愛のない町』（七〇邦訳・上演）、『小さな辻音楽師』、『樽の蜜蜂』、『生きている歌』、『水晶の心臓』など、現代感覚に満ちたおとぎ話劇は、ソビエト各地の児童劇場の人気レパートリーになつている。巨大なコンピューターが広場にすえられた町を舞台にした『最後の貧乏人』（二幕のおとぎ話・一九七五）は文明批判の趣をもつ。

（中本信幸）

**歌川芳藤** よしかわ 一九〇四年八月（明三七）～西村芳藤 よしむら 一九一九年一月（昭六） 小说家、児童文学作家。本名保。埼玉県の生まれ。川越中

を経て早稲田大学政経学部卒。はじめ大蔵省に勤務し習作に励む。一九三五年農民文学『喉仏』が『文学評論』に載り注目される。三六年『晩春騒』が「作品」の「新人コンクール号」に採用され、文壇に登場した。『部落史』（一九三八年）、『支流を集めて』（三九）などで農村の近代化問題を取りあげ、『光をつくる人々』（三九）で満州移民団の生活を描いた。戦後は児童文学にも筆を染め、少年少女小説『生きている山脈』（四九）五

(○)、「夢のまのこと」(五七)などを発表。後者で小学館文学賞を得る。打木文学をはぐくんでいるのは幼少年期を過ごした埼玉の風土、そして秩父山脈である。自伝的大河小説『天の園』全六巻(七二)は、武藏野の風土に根ざした少年小説であり、芸術選奨文部大臣賞とサンケイ児童出版文化賞を受賞した。同系列の作品に『大地の園』全四巻がある。

内田百閒

一八八九～一九七一(明22～昭46)

(増子正二)

小説家、随筆家。本名栄造、別号百鬼園。岡山市生まれ。一九一四年東京帝国大学独文科卒業。夏目漱石門人となり木曜会で鈴木三重吉らを知る。幻想的短編集『冥途』(一九二二)で出発、『百鬼園隨筆』(三三)、紀行『阿房列車』(五一)などに俳諧的精神を示した。三年絵入りお伽噺集『王様の背中』を谷中安規版画にて出版。ほかに『夕立鰐』(三四)、『無絃琴』所収)、ドイツの伝承をもとにした『狐の裁判』(三八)がある。

(石井直人)

内田莉莎子 一九一八～(昭33～)ソビエト、東欧児童文学作家、翻訳者。本名吉上莉莎子。東京に生まれる。祖父は文学者内田魯庵、父は画家巖。

早稲田大学露文科卒業。主な訳書にソビエトの本、『おきなかぶ』(一九六三)、『てぶくろ』(六五)、R・フ・ラエルマン作『初恋の物語』(八五)、ボーランドのケルン作『すばらしいフェルディナンド』(六七)、チエコス

\*ロバキアの本、ラダ作・絵『きつねものがたり』(六六)、ペチシカ文『マルチンとナイフ』(八一)などがある。

(北畠静子)

内山嘉吉

かきつま

一九〇〇～八四(明33～昭59)

劇作家、演劇教育研究家。岡山県芳井町に生まれ、香川県丸亀市の叔父の養子となつて丸亀中学校卒業。千葉県木下小学校代用教員などを経て一九二七年、私立成城小学校美術教師となる。三三年まで学校劇の指導・劇作に活躍。また兄内山完造を通じて魯迅を知り、中国青年に木版画を指導するなど日中友好に尽くす。東京・神田で内山書店を経営。五七年より日本児童劇作の会会長。『鉄道開通』(一九三二)など脚本多数。共著作に『学校劇の指導』(四九)がある。

内山賢次

けんじやま

一八九六～一九七二(明29～昭47)

(生越嘉治)

英文学者。新潟県柏崎市に生まれる。正則英語学校高等科卒業。内閣印刷局に勤務のかたわら翻訳に従事、主として英米の自然科学関係の啓蒙書の紹介に当たつた。一九三五年ごろより月刊誌『動物文学』(平岩米吉主宰)にシートンの作品を翻訳連載、これが白揚社から出版されてベストセラーとなつた。『私が知つてゐる野生動物』をはじめシートンの著作の翻訳に全力を注いだ。

内山憲尚

けんじょう

一八九九～一九七九(明32～昭54)

口演童話家、児童文化研究家、幼児教育家。憲堂の号

がある。大阪生まれ。東洋大学社会学科、同東洋文学科、日本大学文学部卒業。巖谷小波、久留島武彦、岸辺福雄らの影響を受け口演童話や児童文化、幼児教育など幅広い分野で活動。一九二二年、蘆谷蘆村が中心となつて設立された日本童話協会の活動に積極的に協力し、二三年、蘆村の創刊した「家庭子ども新聞」の編集長も務めた。戦後、他界した蘆村に代わって日本童話協会を再建し、「童話研究」を復刊、六二年からは会長を務めて、蘆村の童話研究運動の遺志を継ぐ。二四年、芝増上寺明徳学園主事となり仏教日曜学校の運動を推進。三一年には「子供の人形座」をつくり人形劇の上演活動にも活躍。二三年、聖美幼稚園長となり、日本私立幼稚園連合会の初代理事長を務めた。また、駒沢大学教授、鶴見女子短大教授として児童文化を講じた。『実演童話十二集』(一九二五 共著)、『日曜学校の新経営法』(二七)、『童話術綱要』(三〇)、『児童大会と司会法』(三一)、『指遣人形劇の製作と演出』(三七)、『劇遊びとその指導』(五一)、『幼児の言語教育と童話教育』(五四)、『児童教化概論』(六二)など一〇〇冊に及ぶ著書がある。

**内山 基**

(うちやま もとい 一九〇三一八二(明36—昭57) 編集者、出版人。横浜市に生まれ、釜山で育つ。一九二八年早稲田大学英文学科卒業後、卒業之日本社に入社、

「少女の友」の編集に従事、三一年同誌主筆となる。

吉屋信子、中原淳一のコンビによる長編少女小説、宝塚歌劇の記事を中心とした抒情路線が人気を呼び、同誌の最盛期をつくった。愛読者の組織「友ちゃん会」に力を注ぎ、独特的の熱弁で各地の少女を魅了した。四年同社取締役退任後、モードエモード社を設立。

(篠達喜健)

**内海繁太郎** (うつみ しげたろう 一八九六—一九六六(明29—昭41) 演劇研究家。香川県綾土町に生まれ、香川師範卒業。県内小学校訓導を経て一九二一年、成城小学校に招かれて上京。斎田喬らと学校劇の指導・劇作に精力的に活動代表作『運命の鐘』。かたわら日本大学に学び、二九年同大学助手、戦後演劇科発足に当たり主任教授となる。主著『人形芝居と近松の淨瑠璃』(一九二六)、『文楽の芸術』(四三)、『人形淨瑠璃と文樂』(五八)。

**宇野重喜良**

(うきら あきら 一九三四—(昭9—) 画家。愛

知県に生まれる。広告美術、挿絵、装丁、舞台美術、絵本に優れた仕事多数。日宣美賞、AD大賞のほかに絵本『あのこ』でイラストレーラー・クラブ賞を受ける。子どもの本の挿絵に『海の日曜日』『二杯目のスープ』(以上、今江祥智文)、『アトリエの馬』(岩瀬成子文)、『あいつの影ぼうし』(紀伊萬年文)など。幻想美にあふれ、鋭い批評眼に裏打ちされた繊細華麗な画風で、輩出するイラストレーターの中で、一頭地を抜く存在で

ある。

(今江祥智)

ウノカツヒコ

宇野克彦 かつひこ 一九三二—(昭7)—児童文学作家。東京に生まれ、埼玉県東松山で育つ。早稲田大学理工学部電気工学科卒。北海道の炭鉱に勤務後、東京の電子会社へ転職。その間『白いてがみ』(一九六五)、『ごぶたのうでどけい』(六九)などの作品をまとめた。軽いタッチのファンタジーを得意とし、作品数は少ないが、技法は確かであり、根底に流れているのは、人間としての連帯と思いやりである。代表的童話集に『小さなキツネがやつてくる』(七一)、『ごぶただ一〇ばん』(七五)がある。

(中村祐子)

宇野浩二 こうじ 一八九一—一九六一(明24—昭36) 小説家、児童文学作家。福岡市に生まれ、早稲田大学英文科中退。一九一九年『藏の中』『苦の世界』を発表、新進作家として認められた。ユーモアとペーススを交えた独特の饒舌スタイルは、宇野小説の特徴であり、それは『子を貸し屋』(一九三三)、『軍港行進曲』(二七)などにも及ぶ。昭和のはじめ脳を患い、しばらく作家活動を停止したが、三三年に再起、『枯木のある風景』『枯野の夢』など枯淡な心境小説に転じた。宇野の児童文学とのかかわりは、文壇登場以前からあり、壳文家としてのスタートそのものが童話であった。一五年五月号の『少女の友』に載った『搖籃の唄の思ひ出』にはじまり、その生涯に翻訳・翻案・再話を含めると

一九〇編余の児童文学作品を残している。これは文壇作家としては例のない数であり、この作家と児童文学との深いかかわりを示すものともいえる。児童文学作家としての宇野は、初期の『少女の友』『良友』時代、新進作家として小説を書く一方で、『赤い鳥』『童話』などに作品を寄稿した時代、それに大戦後の『少年倶楽部』『少女倶楽部』、小学館発行の学年別学習雑誌に寄稿した時代と、およそ三期に分けて考えることができる。創作童話集は『少女哀れ知る頃』(一六)、『海の夢山の夢』(二〇)、『帰れる子』(二二)など、戦前すでに三〇冊にも及んだ。浩二童話は平易な文章と筋の展開の工夫で子ども読者を惹きつける。とくに第二期に相当する『赤い鳥』時代に発表したもののがよい。『露の下の神様』をはじめ、『アイヌ爺さんの話』『ぢやんぱん廻り』『春を告げる鳥』といった彼の童話を代表する作品がこの時期に発表されている。当時文壇作家のほとんどが童話を書いたが、多くは小遣い錢稼ぎの片手間仕事で、童話を書くことの意味など深く考へることがなかつた。が、宇野浩二是『童話めいた小説』を排し、『子供の世界の消息』としての童話を書くことを主張し、物語性を重視した。童話は彼の夢みる資質に合致したその文業の一つと考えられるのである。六一年九月二一日歿。

【搖籃の唄の思ひ出】 ゆりかごのうた  
のおもいでた

短編童話。初出一九

一五年五月「少女の友」。台湾のある山すその村を生蕃が襲い、娘がさらわれる。一五年後、再び生蕃が村にやつてくる。が、今度は村人が生蕃を負かし、隊長の少女を生け捕る。少女は反抗心強く「殺せ」と叫ぶが、母の歌う子守唄に昔を思い出し、涙を流すという筋。宇野はこの作品を書くのに、はじめローマ字につづつてそれを日本字に当てはめるという努力をし、一語一語に気を配った表現をしている。読者としての子どもを十分意識した作品といえる。

【参考文献】水上勉『宇野浩二伝』（一九七一 中央公論社）、洪川麿『宇野浩二論』（一九七四 中央公論社）、紅野敏郎『宇野浩二解説――童話作家としての宇野浩二』（一九七七 『日本児童文学体系』9 ほるぶ出版）

ウンゲラー　トミ　Tomi Ungerer 一九三一～ アメリカの絵本作家、画家。フランス生まれで、国籍も変えていない。年少時から絵に親しみ、デザイン学校に進むが、放校される。ヨーロッパでの放浪の旅を経て、一九五六年にアメリカに移住。『メロップス一家のわくわく大冒険』（一九五七）を皮切りに、『へびのクリクター』（五八）、『エミールくんがんばる』（六〇）、『すてきな三人ぐみ』（六一）、『月おとこ』（六七）『ゼラルダと人喰い鬼』（六七）、『ぼうし』（七〇）、『ラシースおじさんとふしぎな動物』（七一）、『アルメット』（七四）など、独創性のある絵本をつくり、我が国にも、その

ほとんどが翻訳されている。風変わりな主人公、奇抜な着想、スピード感的な筋の展開をもち、画風はグロテスクで強烈だが、全体にシニカルな笑いにあふれている。その笑いは後年になるほど強い。絵本のほか、現代文明を批判した画集、漫画、ポスター類があり、アメリカにおけるブラック・ユーモアの旗手の一人である。

（原 昌

### 海野 厚

厚  
あつし

一八九六～一九二五（明29～大14）童

謡詩人。本名厚一。静岡県生まれ。静岡中学卒業後上京し、はじめは俳句に傾倒した。俳号長頸子。『赤い鳥』に童謡を投稿して北原白秋に認められ、童謡の創作に打ち込む。一九二〇年「海国少年」の編集・経営に従事。一二二年から童謡集『赤い櫻』（一二二）、『七色鉛筆』（一二三）、『背くらべ』（一二三）をシリーズ「子供達の歌」として出版。代表作は『背くらべ』『おもちやのマーチ』『からくり』など。郷里の豊田町に「背くらべ」の碑がある。

（畠中圭二）

### 海野十三

十三  
じゅうさ

一八九七～一九四九（明30～昭24）

作家。本名佐野昌一。別号丘丘十郎。徳島市生まれ。早稲田大学理工学部卒業後、通信省電気試験所に勤務。江戸川乱歩の作品に触発されて『遺言状放送』などの純SFを無線雑誌に執筆し、一九二八年『電気風呂の怪死事件』で「新青年」にデビュー。以後いわゆる文格推理作家として推理・軍事・SF小説を発表。とく

にSFの分野では科学者としての専門知識と豊かな想像力を駆使して『地球盜難』(一九三六)、『十八時の音楽浴』(三七)など本格的作品を生み出し、短編『振動魔』(三一)、『俘囚』(三四)などでSFとミステリーの融合を図るなど大きな業績を残した。森下雨村の推挙で「少年俱楽部」に書いた『太平洋雷撃戦隊』(三三)を契機に、その活動は成人より青少年対象へ大きく傾斜した。短編『崩れる鬼影』(三三)の異星生物の扱いの斬新さは刮目に値する。現実的な近未来戦記『浮かぶ飛行島』(三八)、『太平洋魔城』(三九)、『ああ海底大要塞』(四一)などで科学技術が国力の基礎であることを主張する一方、『海底大陸』(二八)、『火星兵团』(三九～四〇)、『地球要塞』(四〇～四一)、『宇宙戦隊』(四四～四五)などでは異星人の侵略を描くことで全地球的な視野の必要性を説いた。自著の後記などでしばしば一般文芸、読書界の科学に対する無知と偏見を嘆き、若い世代に期待する発言を繰り返しているのも注目される。戦後も『次元漂流』(のちに改題して『謎の透明世界』、四六～四七)、『三十年後の世界』(四八)、『怪星ガン』(四八～四九)などの力作でSFの興隆に貢献したが、結核のため四九年五月一七日に歿した。海野の勧めで文壇に入った木々高太郎の監修により『海野十三全集』全八巻(五〇～五一)が編まれた。また六二年には郷里の徳島公園内に海野十三碑が建てられた。

「地球要塞」ちきゅうさい 長編小説。一九四〇年八月～四年二月「譚海」連載。第三次大戦の危機迫る未来の地球上に、混乱に乗じて地球侵略をたくらむ金星人の密使が潜入。四次元震動を利用するこの敵に対し人類は団結し、全地球を要塞化する。設定・構成・小道具など全般にわたりSFとして完成度の高い作品。金星人の超科学力で戦艦が宙づりになるシーンが印象的で、科学的仮説を視覚的な場面に組み立てる海野の感性の鋭さを示している。

【参考文献】二上洋一『少年小説の系譜』(一九七八 幻影城)

(柴野拓美)

## 工

エイキン ジョーン Joan Aikin 一九二四～イギリスの児童文学作家、小説家、脚本家。一〇代から詩や物語を書いていたが、短編集『All You Ever Wanted あなたがほしがつていたものみんな』(一九五三)をはじめて子どものために書いて以来、本格的に作

エイキン ジョーン Joan Aikin 一九二四～イギリスの児童文学作家、小説家、脚本家。一〇代から詩や物語を書いていたが、短編集『All You Ever Wanted あなたがほしがつていたものみんな』(一九五三)をはじめて子どものために書いて以来、本格的に作